

ブック

村尾氏は、「人生最凶の人は家族」と訴える。とりわけ氏の「駆け出し」の頃の失敗談は示唆に富む。覚

せい剤乱用少女のサヤカの「社会で立ち直りたい」と懇願し続ける気持ちに氏は賭け、民間団体に身柄を預ける措置をとった。だが彼女は失踪

し、警察に保護される。彼女は

氏に小声で言う。

「先生、ヤクザ

ってすごいよ。シャブやってる

女の子がいるって聞いたら、そ

こにさっと集まって来るんだよ」。

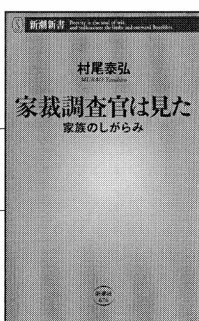
結局少年院に送られたサヤカだが、半年後に再会したとき、氏は胸が熱くなる。サヤカは幼い少女に戻っていたのだ。学校に

おいても、学校や家庭だけで生徒を守り切ろうとするのではな

く、地域や社会の教育的諸機能と連携して対応することが大切

だといえよう。

終章では、子どもや若者のよ



家裁調査官は見た 家族のしがらみ

村尾泰弘 著

778円 新潮社新書
03-3266-5111

り一般的な問題について論じる。ギャングエイジを経ない子どもが増え、互いに腹を割って話をする場がなくなっている。これに対して氏は深い人間関係を樹立する指導を提唱する。

評者は考える。深く関わらないことは、いまや中高年にまで至る個人化社会における衝突しないための共存の作法であり、さらには距離と親密を二律背反

としない傾向まで生まれつつある。このようなとき、村尾氏のいうような深い人間関係を樹立するための展望と方法は、子どもに、若者に、

親に、教師に対してどのように指し示すことができるのか。この時代において、「深い人間関係の樹立」自体、とんでもないアナクロにもみえる。しかし、人々が学びあい、支えあう社会の形成を教育の目的とするならば、その樹立こそ教育にとっての不可欠な「現代的課題」と考

えるべきなのかもしれない。
(聖徳大学教授・西村美東士)